

2022年9月18日(日)／説教者：國分美生

説教：「共に生きる知恵」

聖書：ルカによる福音書12:13～21

「心して、あらゆる貪欲を警戒しなさい」…それは単に道徳的な課題ではなく、イエスが宣べ伝えた神の国と関連するキーワードです。

譬え話で「ある金持ち」と聞いた人々は、広大な農地は持つが、自分では肉体労働はせず、貧しい農民に働かせて、都会で優雅に贅沢に暮らしている人物を思い浮かべます。大豊作で、収穫物が有り余るほどになった時、この金持は自分のことしか考えず、独りで思いめぐらしている孤独な人というのが見えてきます。1世紀のパレスチナ文化の中では、大事なことは共同体の中で、みんなで議論にたっぷりと時間をかけて決めるのが常識でした。議論し合うこと自体が、共同体の仲間意識・連帯感を強めるものとして価値があり、共同体に属することは人生の基礎・基本でした。それは旧約聖書の記述からも見ます。イスラエルの神のもとにおける信仰共同体は、すべての人が神の前に平等であるという理念を大事にしました。立場の弱い者たちが冷遇・不公平な目に合うのは神の御心に反しているという概念が人々の中にありました。また、物というものは全体量が限られ、富を誰かが独占すればその他の人々が欠乏すると考えられていたので、富は神から与えられた恵みとして、共同体のために用いられるべきものだという認識が人々の中にありました。

貧しい民衆にとっては、この譬えは、自分たちの実際の生活を反映したものでした。ですから自分たちの人生や命を富んでいる者が奪い取っていることを、改めて思い出したことでしょう。ですが神は「お前の備えたものは、いったい誰のものになるのだ」と問いかけます。それは譬え話の金持ちにだけでなく、いまここで、イエスの話を聞いている者たちへ向けられた問いかけでもありました。イエスの意図は、神が授けた「ともに生きるための知恵」を無視して、共同体をないがしろにしている、誰か特定の個人を吊るし上げるのではなく、そのように社会で公然と行われている神への裏切りと、不公平な社会の構造そのものに人々の目を開かせることでした。この譬えを聞いた人々は、何を思い、何を決意し、そして何を希望として受け取ったでしょうか。一人ひとりの命と生活が守られ、平和に生きていくために、神は、金持ちにも、そして不当な扱いを受けている貧しい者たちにもチャレンジを与えているようです。同様なチャレンジを、今私たちも受けているように思えてなりません。(國分美生)